

田中治彦 編著

『開発教育 ―持続可能な世界のために―』

学文社 2008 年 A5 判 254 頁 ¥2520(税込)

米井慎一

開発教育のエッセンスが詰まった本である。本書を読むと、開発教育とは何であるのかが明快に理解できる。

近年、人口、貧困、環境など地球的課題がクローズアップされるにともない、大学や短大、専門学校などにおいて開発教育やその関連の学部や学科、コースの開設が増えてきている。本書は、編著者の記述にあるように、大学生や専門学校生向けの開発教育の「日本で最初の大学生向けテキスト」である。

本書の構成は、3部13章からなる。

第1部は「開発教育の理念と歴史」で、第1章「開発問題と開発教育の歴史と現状」、第2章「開発教育の内容・方法・カリキュラム」、第3章「ヨーロッパとアジアにおける開発教育」である。開発教育の始まりから現状、開発問題と開発教育の関連性などの要点が理論と実践の両面から記述されているので、開発教育の全体像を把握するのにとてもよい。

第2部は「地球的課題と開発教育」で、地球的課題についての概観とその問題解決に向けて開発教育がどのように取り組んでいるのかが記述されている。具体的には、第4章「ミレニアム開発目標」、第5章「貧困」、第6章「環境」、第7章「食と農」、第8章「人の移動」、第9章「子ども」、第10章「ジェンダー」となっている。

第3部は「これからの開発教育の展開」で、これからの開発教育の課題と実践への展望を、第11章「学校での開発教育」、第12章「地域からの開発教育」、第13章「国際協力と開発教育」の3分野から示している。

各章の執筆者は開発教育に対する造詣が深く、(特活)開発教育協会(DEAR)の会員として長

年活躍している実践者、実践研究者である。各章の冒頭には、各執筆者がこの分野にかかわるきっかけとなった経験「原体験」や現在の熱い思いなどが綴られており、入門者でも親しみをもって読めるようになっている。また、各章末には「学習を深めるための課題」が設定されており、その章の内容をふり返った質問事項があげられ、これらはそのまま各章学習後の小テストの設問やレポートの課題として使うことができる。参考文献も豊富に紹介されており、より深く学びたい人にとっては助けとなるであろう。さらに、各章に関連する参加型学習の教材が「教材紹介」で紹介されており、ファシリテーターとなる教員や各団体の担当者にとっても参考になる。

特筆すべきは本書の内容と汎用性である。今まで開発教育関連の図書はいくつも出版されているが、貧困や環境、子ども、NGOと開発教育、地域からの開発教育など、特定のテーマについてのものであり、そういった意味で本書の内容は開発教育の入門書として最適である。

また、各執筆者がその分野のエキスパートであり、ともすれば複雑で難解な内容を、要点やキーワードを的確に示しながら平易な文章で簡潔にまとめている。本書は基本的には大学生、専門学校生を対象としたテキストであるが、第1部は、これから開発教育を実践しようとするNGO職員、地域の国際交流協会の職員などが読めば、必ず実践の助けとなるであろう。また、第2部は、大学生ならずとも高校生の「現代社会」のテキストとしても使用できると思われる。第3部は、現在開発教育に取り組んでいる学校、地域、国際協力の各分野の実践者が読めば、今後の方向性を考えるヒントとなるだろう。

本書は、開発教育を学ぶ学生だけでなく、開発教育を志す者、実践している者にとって、必読の一冊である。